

## 佐々木正美先生を偲ぶ

小児療育相談センター 原 仁

1981年1月のある日の昼休みだったと思います。佐々木正美先生からお電話をいただきました。佐々木先生が所長をされている小児療育相談センターで非常勤医として働かないかとお誘いでした。二つ返事でお引き受けしたのは言うまでもありません。当時郡山の病院に東京女子医大の医局から小児科医として派遣されていましたが、4月から東京大学病院で児童精神科の研修を始めることが決っていました。自閉症臨床に強い関心を抱いていたからです。佐々木先生を通して東大精神科医局長の神保先生にご紹介いただき、東京女子医大小児科の福山幸夫教授の許可を得た後だったので、佐々木先生のご配慮がとても嬉しかったです。1981年7月から始めた小児療育相談センターの外来は今も続いています。

最近の研修医ならばそう珍しい専攻の変更ではないのですが、当時は精神科医を志す「変わった小児科医」と思われたようです。結局、児童精神科医になるまでの覚悟はなく、2年間の研修後小児科医に戻りましたが、振り返ればこれ以降、佐々木先生の後を追うお仲間の一人となりました。

小児療育相談センターの所長であり、東京女子医大小児科の非常勤講師でもあった佐々木先生は、傍にいる小生に教えるという素振りを見せられたことは一度もありませんでした。いつも同じ職場にいる仲間として接してくださいました。それは少し不満でもありました。東京女子医大の外来の陪席、佐々木先生が入院と指示された患者は率先して病棟担当医を引き受けましたのでその回診、小児療育相談センターでの隣の診察ユニットでの診療などでとにかく佐々木先生の臨床の技を盗むつもりで聞き耳をそばだてる毎日でした。一時期は「佐々木正美の追っかけ医者」を自任しておりました。

ショッキングな出来事は、佐々木先生が20年間所長を務められた小児療育相談センターをお辞めになり、川崎医療福祉大学に移られるという知らせでした。その後のある日、昼食後の雑談で、佐々木先生は「臨床医でありたいという思いはあるが、そうするエネルギーが続かない」と静かに話されました。臨床の厳しさを思い知る出来事でもあり、引き際を意識するようにという佐々木先生の言葉が今響きます。

16年間の研究職生活に別れを告げて、最後の仕事場として選んだのは佐々木先生が関わられた横浜市の療育センターでの臨床でした。地域療育という稀有なる組織を作り上げた佐々木先生のアイディアと馬力に圧倒されていましたが、何とか佐々木先生に認められたい、そして追っかけ医者の人生最後のエネルギー

一を注ぎ込みたいと願っての転職でした。この決断は佐々木先生が後押ししてくださったのだろうと勝手に思っています。

残念ながら、大学教授としての、そして TEACCH プログラムの紹介者としての佐々木先生のご活躍は遠くから拝見するという立場にいました。たくさんの賞を受けられた佐々木先生は立派な業績を残されたのでしょうか。しかし、なにより臨床医としての佐々木先生が大好きでした。憧れでした。

皆様の記憶に残っているのは、数多くの講演の中での佐々木先生の暖かくもありかつ強く、そしてよく通ったあのお声だと思えます。佐々木先生に診てもらった方々はまったく同じ声を診察の場で聞き、安心して外来を去っていくのです。まねようとしても無理と悟っていても、せめて佐々木先生の志を引き継ぎたいと願います。ご逝去のお知らせを受け、ここに改めてお誓い申し上げます。追っかけ医者はまだ止めません。佐々木正美先生、本当にありがとうございました。

(本追悼文は一般社団法人日本 LD 学会「LD 研究」第 26 巻 4 号に寄稿したものです)

